

ナショナルコレクション申請書

新規申請 申請更新 (いずれかに)

■申請年月日 2018年 1月 12日

■申請団体・申請者名
宇治市植物公園

■申請団体の代表者名（個人での申請の場合は不要）
非公開

■申請団体・申請者の連絡先（住所、電話、メールアドレス）
非公開

■コレクションの所在地（コレクションが分散している場合は主たる所在地）
京都府宇治市広野町八軒屋谷25-1

■コレクションの公開に関する現状と今後の方針
現在は保有品種すべてを来園者に常時公開している。
今後は収集を増やし、現存する全品種を栽培展示する方針である。

■コレクションの分譲に関する現状と今後の方針
現在は植物園や公的機関、京都花蓮研究会会員の譲渡希望があれば種レンコンを分譲している。
今後も植物園や公的機関で分譲希望があった場合に可能な限り分譲し危険分散を図る方針である。

■コレクションのテーマ

巨椋池(おぐらいけ)由来のハス

■コレクションの概要

巨椋池は現在の宇治市、久御山町、京都市伏見区の3地域にかけて広がっていた、かつては面積約800ヘクタールの大きな池であった。『巨椋池干拓誌』(1962)によると、国内産水草の80%あまりが生育する水生植物の宝庫であったが、1933年から1941年にかけての国営事業により干拓されて農地となった。

「久御山町の今昔」(1981年、坂部五三夫)によると、用明天皇(585-587)が宇治田原へ行幸される際に「神楽や一口川に鯉のぼる 人の恋するはちすはわゆけ」(587年)という御歌が詠まれており、巨椋池沿岸の集落であった一口(いもあらい)とハスの古名の「はちす」が出てくることから、巨椋池周辺には古くからハスが生育していたことがうかがえる。江戸時代の文献「都花月名所」(1793年、秋里湘夕)や「京都名勝案内記」(1895年、金森直次郎)、「京都名所独案内」(1903年、的場麗水)、「巨椋池の蓮」(1950年、和辻哲郎)にはハスの名所として巨椋池が紹介されるなど、江戸時代から昭和にかけて著名な文人などが巨椋池のハスを楽しんだ記述が多くある。

京都花蓮研究会初代会長の内田又夫氏と西村金治氏は幼少期に見た巨椋池のハスを懐かしみ、1941年までに干拓され農地になったかつての巨椋池を1960年代頃から巡り、幼芽(生育中の先端の芽)の採集を行った。それらを栽培したものは100品種を超え、そのハスの花色は白、爪紅、紅、桃、斑とあり、花形にも一重や八重があり変異に富んでいる。

宇治市植物公園は、地元にある植物園として、かつて宇治の地にあったこれらの多様な巨椋池由来のハスを保全し、来園者に地域の残すべき植物として知ってもらうため、1999年より巨椋池土地改良区や京都花蓮研究会からレンコンを分譲していただき、常時栽培展示を行っている。また2005年から毎年7月に観蓮会を開催し、巨椋池のハスについて、来園者により興味や親しみを持ってもらえるよう、職員が案内を行っている。

■申請者が保有するコレクションの種数、品種数、個体数(保有植物リストおよび写真は、別紙「保有植物リスト・写真ファイル記入要領」にしたがい提出)

54品種 各品種1~3鉢

■申請するコレクションのこれまで報告されている総数と申請者が保有する数

根拠にしている「巨椋池蓮図鑑」(2017年、京都花蓮研究会)によれば総数92品種
なお、DNAによる分析では総数65品種にまとめられている。(参考)

保有数54品種

■コレクションの栽培管理状況(所在地が分散している場合は、ここに全てを列記)

3月下旬 植え替え(ラベルのチェック、更新)

5月(浮葉の頃) 追肥、害虫防除、除草

6月 施肥、除草

7月 花がら摘み、除草

8月 お礼肥、害虫防除、除草

9・10・11・12月 枯葉取り

担当職員1名が主に栽培管理を行っている。灌水は冬季で1週間に1度、夏季は毎日行

っている。3月の植え替えは担当職員1名が品種のラベル確認を行いながら他5～6名で10日間ほどかけて行っている。

■コレクションの導入記録及びデータベース化の状況

2016年以降の導入記録は揃っているが、それ以前の詳細な記録は抜け落ちている箇所が大半である。

2016年以前の記録はデータベース化していないが、紙ベースの記録によると、1999年に‘巨椋炎’など10品種を、2000年から2003年までに39品種をさらに導入している。2016年から2018年に既存の品種との重複はあるが22品種を導入した。2016年以降の導入記録はデジタルと紙ベースで管理している。詳細な導入記録のないものについては分かる範囲でデジタルデータ管理を行っている。

■コレクションのラベル表記状況（栽培管理用ラベルや展示用サイン・ラベルなど）

展示用のラベル表記は正確なサインを心掛けている。札落ち防止のために品種名のラベルは2～5枚を鉢内または鉢そのものに貼り付けている。

展示サインには可能な範囲で採集場所、採集年や旧名などを表記している。

また、ラベルは劣化を防ぐため2～3年に1回新しいものに変える。

■コレクションへの協力団体・協力者（種名の同定、導入など）

京都花蓮研究会（会長 植村則大、事務局 京都市伏見区竹田七瀬川町15-1）

巨椋池土地改良区（京都府宇治市槇島町一ノ坪8-8）

品種の同定については京都花蓮研究会の金子明雄氏の協力を仰いだ。不確かな品種については破棄し、確実な種レンコンを京都花蓮研究会より分譲いただいた。

■コレクションの長期保存のための増殖・危険分散体制

宇治市植物公園を含め京都花蓮研究会会員間で種レンコンの分譲を行い、危険分散を図っている。

2017年に京都文教短期大学にレンコンを分譲した。

■これまでのコレクションの広報・利用実績（研究・展示・分譲などを含む）

本コレクションを用い2005年から開花最盛期の毎年7月に「観蓮会」を行っている。

2016年から展示会「巨椋池の蓮展」を行っている。地元紙などで毎年掲載していただいている。

また、2017年に宇治市にある京都文教短期大学にレンコンを分譲して巨椋池のハス植栽計画へ協力し、それについて地元紙などで掲載していただき、同短期大学から感謝状をいただいた。